

<エッセイ>

どこにも完全には属せない私が、アイドルになる理由 Belonging Nowhere, Standing on Stage: Why a 1.5-Generation Japanese American Chooses to Be an Idol

かんだちちよか

Choka Kandachi

純日本人の両親のもとに生まれ、一度も日本で暮らすことなくアメリカで育った私（かんだちちよか）は、いわゆる「第1.5世日系アメリカ人」に当てはまる。

日英のバイリンガル力を競うオリンピックがあれば、メダリストになれるくらいの英才教育を受けた。

そこに、生まれ持った素質と（自分で言うのもなんだが）血と汗と涙の努力が重なり、この文章を書ける日本語力と、それ以上の母国語である英語力が私の一番の武器になった。

中身はアメリカ人なので、ほんやくコンニャクを食べたアメリカ人と思ってもらえるとありがたい。

このように情報量の多い自己紹介が必要なことでわかる通り、「日系アメリカ人」という言葉で説明できるはずの自分の存在は、案外どこにも当てはまらない。

顔があまりにも日本人であり(遺伝子が100%ジャパニーズなので)且つ日本語が流暢ことに起因するのだろう、日本に行けば「英語が上手い日本人」として扱われる。母国語が英語でも、日本に住んだことがなくても、日系アメリカ人のアイデンティティは認識されないことが圧倒的に多い。

一方でアメリカにいと、今度は「second-class citizen」として扱われる。自分がどれだけアメリカで育ってきたかに関係なく、「アジア人」というカテゴリーに入れられ、「親はどこから来た？」と言われることも多い。アメリカでの物語の主人公は白人であることが当たり前であり、アジア系である時点で自分が社会の中心になることはあり得ないのだ。やはり見た目が白人(white-passing)の人とは社会からの扱われ方が違い、静かな差別の中で生きていた。「両親の生まれた異国」の影響を受ければ受けるほど、母国の人間には余所者とされてしまう。

どちらの文化も自分の一部であり、どちらも愛している。愛していなかったらここまでどちらの言語力も教養も磨くことはなかっただろう。でも、どちらか一方だけで見られることが多く、「両方を持つ人」として理解される機会は少ない。

幼い頃の私は自分に似た人をメディアの中にも周囲にも見つけることができなかった。

日本とアメリカ、二つの文化の間で揺れながら生きていて、どちらにも完全には属していない人。そんな人間が将来どんな大人になればいいのか、どんなふう生きていけるのか、想像するための材料がなかった。

私は常にどこかはみ出し者で、ありのままの自分を受け入れてくれるコミュニティを探して生きてきたといっても過言ではないだろう。

現在私は日本でアイドル活動をしているが、そのきっかけとなったのは妹がアイドルに挑戦してみてほしいというお願いだった。

当初、キラキラ輝く日本のアイドルと自分はかけ離れた存在だと思っていた。その考えを変えてくれたのは、変わりゆくアイドル界の中に生まれた「アイドルとしての多様性」を体現するアイドル達であった。

近年では、私が育ったアメリカにも、アイドルを愛し、アイドル活動をする人たちのコミュニティが少しずつ育っている。出会った海外アイドル界限の子たちは、自分たちが何を伝えたいのか、誰に届けたいのか、誰にとってのロールモデルになりたいのかがとても明確だった。

誰に共感してほしいのか。

どんな価値観を大切にしたいのか。

どんな場所を作りたいのか。

その軸がはっきりしていて、「ただ可愛いから J-POP アイドルをやる」のではなく、自分たちの存在そのものに意味を持たせようとしている姿が印象的だった。

私も、このアイデンティティを体現するロールモデルでありたい。そう思ったとき、やはり私も彼女たちに近い価値観を持っているのだと感じた。

いつしか、「アイドルになりたい」という憧れの気持ちが、「アイドルとして成し遂げたいことがある」という野望に変わっていった。

昔の私のように、「自分に似た人がどこにもいない」と感じている誰かに、「居場所があるよ」と伝えられること。

そのためには、まず自分自身が花開ける場所を見つけなければならない。

私が今所属しているアイドルグループ「アイドル失格」は、私と正に同じ夢を掲げている。

同じ「アイドルグループ」という言葉で括られていても、コンセプトや目標はグループによって全く違う。かわいい系かっこいい系などビジュアルの系統や音楽性の違いはもちろん、活動方針やストーリー性も様々だ。

弾けるフレッシュさが目立つグループもあれば、メンバー全員が母親としてのライフステージを保持したまま活動する、いわゆる『ママドル』として独自の支持を集めるグループもある。武道館を目指すグループもあれば、ずっと同じ 30 人の前でライブをし続けることが目的のグループもある。

「アイドル失格」は、個性はバラバラだが同じ志を持ったメンバーが、己の力でアイドル界の厳しきや理不尽に抗い、この世に生きづらさを感じる人々の居場所になることがコンセプトである。

社会のどこかで生きづらさを感じている人も、何かに夢中になれる人も、自分のままでいられて人生を豊かにできるコミュニティを作ること为目标としている。

それはグループの目標であると同時に、私自身がずっと求めてきたものでもある。

日系アメリカ人だけではなく、「どこにも完全には当てはまらない」と感じている人たちのために。

文化や国籍に限らず、自分の居場所が見つからない人たちのために。

学校や職場、家庭の中で生きづらさを感じている人。どこにも馴染めないと感じている人。「普通」から少しはみ出してしまう人。どこを見ても、自分の生き様を肯定してくれる存在に出会えない人。

アイドル活動を通して、そんな人にとって「ここにいていいんだ」と思える場所を作りたい。

そして、昔の私が欲しかった「ここにも自分と似た人がいる」と思える存在になりたい。

